

アメリカと日本の架け橋・湧川清栄

ハワイに生きた異色のウチナアンチュ



SEIYEI WAKUKAWA:
*Building Bridges of Understanding
Between America and Japan*



アメリカと日本の架け橋

湧川 清栄

ハワイに生きた異色のウチナーンチュ

SEIYEI WAKUKAWA:

*Building Bridges of Understanding
Between America and Japan*



SEIYEI WAKUKAWA:
Building Bridges of Understanding
Between America and Japan

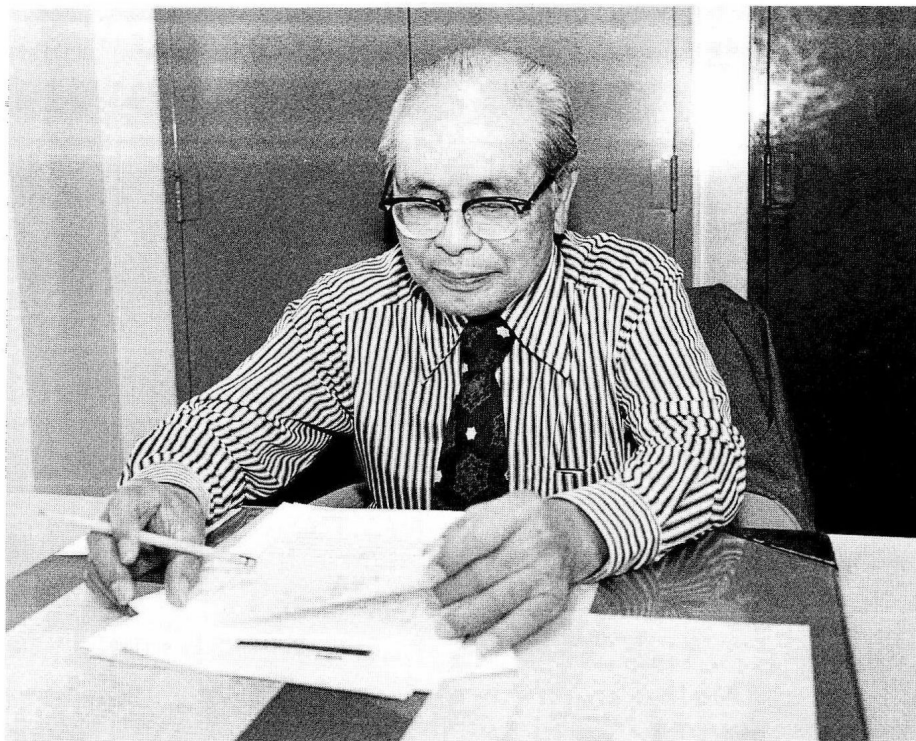


アメリカと日本の架け橋・湧川清栄——ハワイに生きた異色のウチナーンチュ

SEIYEI WAKUKAWA

Building Bridges of Understanding Between America and Japan

2000年3月25日発行
編集・発行 湧川清栄遺稿・追悼文集刊行委員会
発行人 外間守善、山城賢孝、湧川勢津子
発行所 ニライ社
那覇市辻1-1-6 〒900-0037
電話 098(867)9111
印刷所 瞬報社写真印刷株式会社

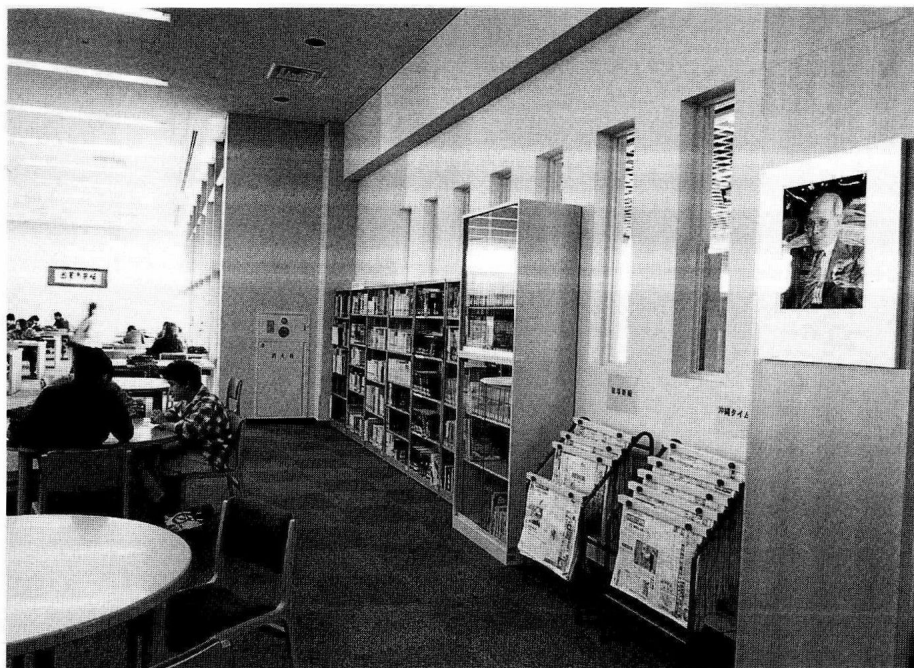


在ホノルル日本領事館で執務中の湧川清栄氏
(ハワイ報知・代見一氏写す。1985年7月23日)

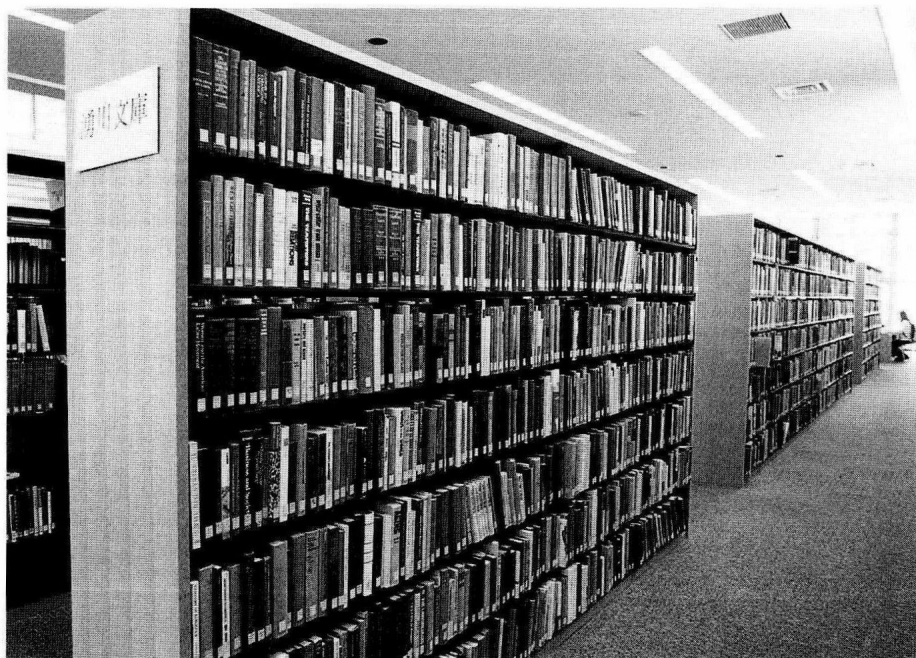
湧川文庫



琉球大学附属図書館の「湧川文庫」。約1万7千冊が地下の書庫に収められている
(撮影：嘉納辰彦、次頁も)



名桜大学附属図書館の入り口には湧川氏の写真が飾られている

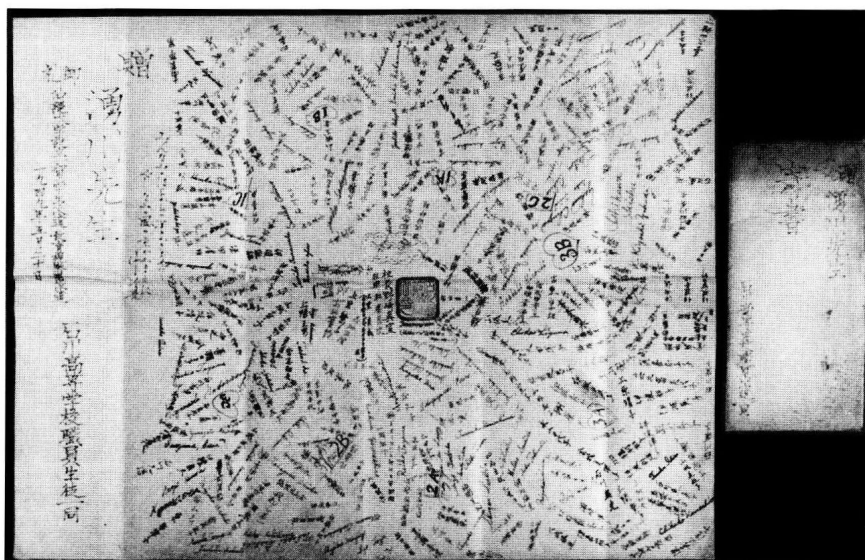


名桜大学附属図書館には約2万冊が寄贈され活用されている。
この他、今帰仁村歴史文化センターにも「湧川文庫」がある

沖縄救済更生会



ハワイから届いた小包の整理風景（1948年10月26日、沖縄民政府構内那覇国際郵便局で）



石川高校から沖縄救済更生会あてに贈られた寄書き（1949年5月20日付）



第1回研究生・留学生の壮行会で。前列中央が志喜屋孝信知事。その他の出席者については402頁を参照（1948年6月3日、知念ハイスクールで）



前列左から留学生の長嶺文雄、伊芸諒寛、端山敏経、志喜屋知事、研究生の瀬長浩、島袋文一
後列は選考に当たった人々、右から3人目は松岡政保氏（写真提供：長嶺文雄氏）



ハワイに到着した5人の留学生。左から更生会の役員、端山、長嶺、島袋、伊芸、瀬長各氏。右端は湧川氏（写真提供：長嶺文雄氏）



1948年8月、ホノルル市内のパンゴ・パンゴで開かれた留学生の歓迎会で（写真提供：長嶺文雄氏）



ハワイ島ワイピオ溪谷で。先頭に湧川清栄氏。その後
 後に有志の人々と留学生（写真提供：長嶺文雄氏）



留学生歓迎のために開催されたピクニック&相撲大会



戦後初めて沖縄への送金ができるようになり、ホノルル郵便局に
押しかけた県人たちの世話をする湧川氏（左端、1949年6月）

アメリカと日本の架け橋・湧川清栄

ハワイに生きた
異色のウチナーンチュ

序——沖繩の偉人湧川清栄論

湧川清栄遺稿・追悼文集刊行委員長

外間 守 善

1. 湧川先生との出会い

湧川清栄先生と私との出会いは一九八〇年、私がハワイ大学客員教授として渡布し、大学の普及講座「沖繩の歴史と文化」を講義した折だった。初日から湧川先生と私は意気投合した。大学からの帰途私のアパートメントまで寄ってくださり、語り合ったのを機縁にほとんど毎晩私のアパートメントを訪ねられ、夕食まで持参なさって語り合ったものだった。私は先生と語らうほどに、図抜けた頭の良さ、論理的な思考に包まれた話題の豊かさ、博覧強記の知識の広さと深さに傾倒していった。それだけではない、湧川先生は戦争中の沖繩、米軍政下の沖繩、日本復帰後の沖繩、そしてこれからの沖繩を語って飽きることを知らない情熱を傾けてくださった。その折の数ある話題の中から私にとって忘れることのできない話は、環太平洋地域の島嶼社会の研究をする学問を island アイランド (島) の ology オロジー (学問)、すなわちアイスラオロジーと呼びたいということだった。

「沖繩」という島に生成した歴史や文化を、人文、社会、自然科学による学際的な研究を繋げて明らかにしていこうとする学問を「沖繩学」と呼んできた私の視野をグローバルに広げてもらった感じで私はすっ

かり感動した。私はアイスラオロジーを和訳で「島嶼^{しよ}学」にしようかと命名した。沖縄の特殊だと思っていたことがアジアの普遍だったり、アジアの普遍が沖縄の特殊に変容していく島社会の様相だとか、国家、民族、言語という枠組みを越えて生成する大陸的歴史や文化を学ぶ学理論として great tradition グレイトトラディショナルな見方、small tradition スモールトラディショナルな見方について、連日連夜のようにふたりで語り合ったものだった。最近になって日本でも「島嶼学」という学問を主張する学徒たちが出てきているが、二十年前の日本の学界で「島嶼学」という呼称はまったく聞かれなかったものである。

それからの私は、語らいの節々で湧川清栄という巨大な人物の人となり、思想、学問について聞き書きをし始めた。その序の部分を紹介しておこう。

2. 湧川清栄先生のプロフィール

湧川清栄先生は一九〇八（明治四十一）年に沖縄県今帰仁村勢理客で生まれ、十二歳の折兄の呼び寄せ移民としてハワイに渡った。英語をまったく知らないため幼稚園に入れられABCを習得したが、またたく間に秀才ぶりを発揮し、小、中、高校、大学をいずれも飛び級（学年を飛び越えて進級）で終了している。高校時代から有志と共に社会科学研究会を作って社会主義を学び、機関誌として『学生評論』を発行したため危うく奨学金停止、退学処分になるところを切り抜け、一九二八（昭和三）年にハワイ大学に入学（政治学主専攻・歴史学副専攻）している。

大学に入学した年の九月に伊波普猷先生の来布があり、着いたその日の夜共楽館に投宿した伊波先生を訪ね深夜まで質問攻めにしたという。お疲れだったろうに伊波先生はニコニコして応対なされたそう。

若気の至りだったと、晩年の湧川先生は述懐しておられた。来布時の伊波先生は唯物史観については未熟な感じで、ホノルル講演での日本神話の解説も非唯物史観だったそうだが、若い人が唯物史観という歴史理論で沖繩史の解明をするには積極的に賛成なさったという。伊波先生はマウイ島では社会主義者で名高い新城銀次郎（北山と号す。今帰仁村出身）と連日逢って親交を深めておられたという。ハワイ滞在中の見聞を、唯物史観と社会主義的な考え方に立つ「布哇物語」「布哇産業史の裏面」という異色の二論文にまとめた伊波普猷を論ずる時、きわめていいじな部分だが、詳細は本書収載の「対談・ハワイと沖繩の架け橋・湧川清栄×外間守善」を参照してほしい。

湧川先生は一九三一年にハワイ大学四年課程を三年間で卒業（首席優等生）、大学院に入り、一年間は東京帝国大学法学部政治学科に留学、再びハワイ大学大学院に戻るが四年目（一九三四年）に大学での研究を断念して新聞記者（『日布時事』入社）になり社会活動に入っている。それも、東大時代に大阪と神戸のコミンテルン、米騒動、農民運動の研究、資料収集に奔走、社会運動にも参加して帰布し、大学院に戻って書いた長文の論文「日本の社会運動」が大学院をやめることになった直接のきっかけだったという。その論文には日本の無産運動、部落運動、婦人運動、台湾植民地問題、日本のファシズムと戦争への道の糾弾等々が収録されていたという。遺稿として残っているはずだが私もまだ見ていない。若き日の熱血漢湧川清栄とその思想を知るためにぜひ読みたかった論文である。

ここまで記しただけで湧川清栄という人物が並の秀才とは違い、貧困と差別という苦難の歴史を歩んだ人たちの味方になって一生を貫いた奇才、異才であり、厳しい人と風評されながら人間的な温かみを持った気骨の傑物だったことがわかんと思う。

3. 戦時中の大いなる活躍

奇才、異才、そして人間的な気骨の傑物と評した湧川清栄先生の真骨頂は、戦時中における積極的かつ勇氣ある社会活動に映されて發揮されていく。

まず、前出「対談」にも入れなかった湧川先生の勇氣あるエピソードを紹介しておこう。

太平洋戦争が始まり、アメリカにおける日本人への憎しみが増幅されていき、ついにアメリカ在住の日系人が抑留されることになる。ハワイの日系人も大陸のニューメキシコ州の砂漠に送られたという。一九四二年四月のことだった。七月になって湧川先生は同志とも語らい、「日本の軍国主義に反対しアメリカの民主主義の賛同者である私たちに対する『勾留』という強制処分は不当である」という建白書をワシントンのルーズベルト大統領に直訴したという。建白書に対して二ヵ月後大統領から了解したという返書があり、ハワイ軍部も了承して釈放されたという。湧川先生の英文建白書が論旨の通ったみごとなものだったらしく、一九四三年の二月以後、シカゴ大学、コロンビア大学、ハーバード大学に呼ばれて日本語を教える立場になる。

ハーバード大学では、陸、海、空軍占領地民政官の養成と教科書編纂が主な仕事だったようだが、その折（四四年から四五年頃）執筆した論文「日本の小作制度」が日本駐留のマッカーサー司令部に渡って活用され、戦後の日本の農地改革に大きな役割を果たしている。沖縄の貧農の家に生まれ育った湧川先生の心の中ではぐくまれた小さな問題意識が、日本の小作制度を揺さぶる大きな社会問題に発展していったわけである。原文は二百枚以上で、日本の小作制度を改良しないと大きな農村問題がおこる。土地所有の集中化はマイナスである。農民の苦しみを理解し、農民解放運動が急務である、という趣旨だったらしい。その論文については本書の「対談」でとりあげてあるし、小倉武一博士（日本の農政研究の権威）の論文

も収載されているので参照してほしい。

戦後、ハワイに戻った湧川先生は戦争被害の甚大だった故郷沖縄の援助活動に立ち上がり、財団法人「沖縄救済更生会」を組織して大活躍をしておられる。その部分も沖縄の人材育成問題、教育問題をふくめて琉球大学創設のきっかけになっていったことであり、「対談」に詳しい。情熱の人湧川清栄先生を語るのに、ぜひ参照してほしいところである。

4. 「ホーレーコレクション」の渡布

「対談」ではそのほかに「当山久三伝と沖縄県人移民の思想的位置づけ」、「ホーレーコレクションの渡布」などがあるが、「ホーレーコレクションの渡布」のところで語らなかつた部分をぜひ補足しておきたい。それは、フランク・ホーレーさんが亡くなられたとき、未亡人（那覇出身）から比嘉良篤さん（首里出身の実業家、当時東京在住、今は故人）に、日本、中国、朝鮮関係を競売にして借金返済に当てたいが、特に沖縄関係文献を一括して買い取ってほしい旨相談があったという。比嘉さんは早速沖縄研究者である仲原善忠先生にそのことの善処を依頼なされた。当時の金で二万ドルくらいの値段だったらしい。仲原先生は比嘉春潮先生と相談をし、一括買い取りを合意の上、まず仲宗根政善先生に連絡をとり、琉球大学で買い取ってほしい旨申し入れをなされた。ところが、図書購入の財力のなかつた当時の琉球大学ではどうにもならず断念する旨の連絡を受けたという。ちょうどその頃、文献購入を目的に東京に現われたのがハワイ大学の阪巻駿三博士で、早速沖縄関係文献購入の交渉に入ったが、一万ドルほど足りなかつたため一度ハワイに戻り、ハワイ沖縄県人会のワーレン比嘉さんの協力を得て一括購入（約八百六十冊余）の資金を作り、ハワイ大学の蔵書になった、といういきさつである。その後、阪巻博士はホーレーコレクションの